

# アルヘンティーナ Argentina

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

No. 31

20 de Enero, 2001

## 話題

アルゼンチン情勢 .....	2
ボルヘスとタンゴ .....	4
ピアソラの息子 .....	5
移住 100 年 .....	6
フォルクローレの今 .....	7
ペヘレイツア .....	8
インタビュー安田さん .....	9
サッカー世界 .....	10
秋篠宮文庫へ図書 .....	11

日本アルゼンチン協会  
Eメール開設

[argentina@nifty.com](mailto:argentina@nifty.com)

## 新年ごあいさつ

社団法人 日本アルゼンチン協会  
会長 斎藤 英四郎



新世紀、あけましておめでとう  
ございます

わが国とアルゼンチンの繋がりも、新し  
い世紀を迎えました。二隻の軍艦譲渡とい  
う「アルゼンチンの侠気』から始まった20  
世紀は、両国の友好関係を構築した100年  
でした。

今世紀はそれを、さらに発展させ世界に誇れる友情の大  
輪を開花させたいと思います。

会員各位の引き続くご理解とご協力をお願ひいたします。

外務大臣 河野 洋平

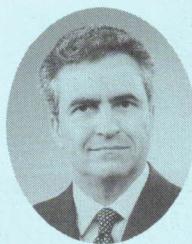


新年に際し、日頃我が国とアルゼンチ  
ンの間の交流促進に尽力されている日本  
アルゼンチン協会の皆様に御挨拶申し上  
げます。

私は昨年12月に外務大臣に再任されまし  
たが、11月に再発足した日本アルゼンチン  
友好議員連盟にも参加し、日ア関係には常々関心を有して  
おります。

政府としては、21世紀においても両国間の様々な分野  
における交流と相互理解の一層の促進に努めていく所存で  
あります。日本アルゼンチン協会の皆様のご協力も得つ  
つ、両国関係の進展を図っていきたいと考えております。

## アルフレド・V・キヤラディア駐日アルゼンチン大使



“Estoy muy agradecido a la Asociación Nippo Argentina por cultivar con tanto esmero y cordialidad nuestra común relación de amistad y franca colaboración. Reconozco en su dirección y membresía a personalidades desde siempre dedicadas a la promoción del mejor entendimiento argentino-japonés. Es un gran honor el contar permanentemente con su sabio y valioso consejo.

Es por ello que me resulta sumamente grato desear a todos los mejores votos por un feliz y próspero 2001. Que el éste año sea pletórico en realizaciones y proyectos que acerquen y estrechen los lazos de amistad, cooperación, comercio e intercambio entre Japón y Argentina!”

Alfred V. Chiaradìa

(協会会員のために、やさしいスペイン語の新年メッセージをお願いしました。)

## 最新アルゼンチン情勢

### ～政治・経済の主な出来事～

小林晋一郎

経済の低迷、財政赤字、政治不安などから国際金融市場でアルゼンチンの対外債務支払いに対する懸念が急激に拡大、予防的措置としてIMFが主導した総額397億ドルの国際金融支援が12月18日決定した。

#### 「ゼネスト」

11月23日正午から24日24時までの36時間、最大労組のCGTの主流派と反主流派に加えCTAによる経済政策に反対する大規模なゼネストが実施された。交通機関がストップし、投石によりバスが被害にあった。中央銀行労組もストに参加、銀行の資金決済が不能となった。

#### 「副大統領辞任」

10月5日、4月の新労働法成立に関連した上院議員の買収疑惑でデ・ラ・ルア政権は初めての大幅な内閣改造を発表、首相、労働大臣、法務大臣などを更迭した。新任大臣は、

首相 クリストチャン・コロンボ（前国立商業銀行総裁）

労働大臣 マチネア経済相兼任  
法務大臣 ホルヘ・デ・ラ・ルア  
(前大統領秘書官)

10月6日、アルバレス副大統領が大統領と人事で意見が相違するとして辞任。現政権は急進党とフレパソの「同盟」政権で、フレパソ党首であるア

ルバレス副大統領の辞任はデ・ラ・ルア大統領の統治能力に疑念を抱かせ、一時は同盟を危ぶむ見方が多かった。しかし、その後、同盟関係は継続している。

#### 「健康保険の自由化」

デ・ラ・ルア大統領は11月29日、健康保険分野の自由化に係わる大統領令を署名した。この措置により、国民は2001年1月から強制加入健康保険部分について、今まで労働組合によって経営されていた公営産業別健康保険組合に加え、現在強制加入に加える形で任意加入している民間の健康保険会社についても強制保険掛け金で選択が可能となる。保険加入者は月額給与の3%、雇用者側が5%を産業別健康保険組合に支払っているが、大部分の組合は経営破綻の状況にある。

**「州政府との財政協定」**  
連邦政府は州の2005年まで利払いを除くプライマリー財政支出の水準を現状維持とする等の内容を盛り込んだ「成長と財政規律に関する連邦合意」を11月、全州政府と締結した。州政府はインターネットなどの手段で毎月の財政状況を公開することが義務づけられていて、財政の透明性を高めている。この合意はIMF支援の前提条件であり、全州との協定締結を確認したIMFはアルゼンチンに支援検討のミッションを派遣した。

### 「財政均衡法修正」

11月10日、連邦政府の財政赤字状況から、2003年に財政均衡を定めた財政均衡法が修正された。財政赤字上限を2001年が70億ドル、2002年が54億5000万ドル、2003年が36億5000万ドル、2004年が23億5000万ドルで、2005年に財政赤字をゼロとする。

### 「2001年予算」

12月12日、2001年予算案が下院で可決され上院に送られた。予算規模は518億9500万ドル、一次歳出407億5200万ドル、金利負担111億4300万ドル、財政赤字65億ドルである。GDP成長率見とおしは2.5%である。

### 「減税法案」

10月23日に政府が発表した減税法案は、下院を通過、11月15日から上院で審議が開始さ

れた。経済界から批判の強かった利子税軽減を含むもので主たる内容は、

- ✓ 借入に係わる利子税を15%から10%に引下げ、2001年7月1日からさらに2%引下げる。また、利子税は所得税、資産税の前払いとして扱う。
- ✓ 資産税の所得税前払いの期限を4年から10年に延長する。
- ✓ 新規投資に関し、投資に関する付加価値税は、他の納税に算入するか、税務当局からの税還付を要求得さる。

### 「IMFの支援」

市場を支配していたアルゼンチンの対外債務支払い能力の懸念を払拭すべく、予防的措置として総額397億ドルの国際金融支援が12月18日、決定した。支援の内訳は、IMFが137億ドル、スペイン政府が10億ドル、米州開発銀行が25億ドル、世界銀行が25億ドル、マーケットメーカーが100億ドル、アルゼンチンの機関投資家が30億ドル、債務マネージメントが70億ドルである。2001年の必要資金は財政赤字が65億ドル、借入償還額が143億ドル、その他が10億ドルで合計218億ドルで国際金融支援で充分にカバーされる。

(こばやし しんいちろう、

当協会編集委員、  
東京リサーチインターナショナル研究理事)

ラ米全般は安定度を増し、  
ア国はまず問題ない

## 在中南米大使 との懇談会

12月15日、経団連主催で在中南米諸国大使と在米公使(中南米担当)計24名との懇談会が東京會館で開催された。年一回外務省で開催される中南米大使会議の合い間に、財界人との懇談会が持たれたもの。ラ米全般の情勢について堀村中南米局長は、政治経済面では安定度を増しており、貧困、失業率、麻薬などの社会的な問題があるもののマクロ的には安定している。経済面では地域統合が進んでおり、アジア太平洋志向が高まっている、と指摘。

木島輝夫在ア大使は、アルゼンチンの経済情勢について目先は心配だが、いい方向にむかっており問題なかろうと次のように説明された。

債務不履行国に陥るのではとの噂もある。しかし新政府の厳しい緊縮財政、地方のボスを巻き込んでの経済成長、徴税率の10%増などの大胆な施策で米国政府、IMFのバックアップを取り付けているためまず問題ない。財政赤字は3年以内に解消されよう。欧米諸国から多大の投資が続いているのに、わが国からの動きが全くないのが懸念材料だ。

(野村)

# 「ボルヘスはタンゴが好きだった」

中村健二

昨年秋、ボルヘス会第一回大会後の懇親会で、野村さん(アルゼンチン協会)に初めてお目にかかった。大会でタンゴを歌ってくださった香坂優さんも交え、おたがい初対面なのに話がはずんだ。初めて聴いたタンゴの余韻さめたらぬまま、わたしが年がいもなく興奮していたせいもあるかもしれない。話はいきおいボルヘスとタンゴのことになり、以前ボルヘスと対談したさい、タンゴを話題にしたこと思い出して、そのことを野村さんにお話しした。本稿はそのことの話のむしかえし、ないしは続きである。

ボルヘスは1979年秋、国際交流基金の招きで来日し、約ひと月滞在している。わたしも招聘委員の一人として多少お手伝いをした。対談は基金の機関紙『国際交流』の依頼で、ボルヘスが離日する直前に行なったもの。ヨーロッパ的普遍性への志向に根ざした、きわめて知的な作品がある一方で、ボルヘスにはコンパドリート(ならず者)やガウチョに取材した血生臭しい物語もある。わたしはタンゴ論を手がかりにして、彼らにたいするボルヘスの考えを確認してみたかった。以下に対談の一部を抜き書きする。

N／ボルヘスさんは「タンゴの歴史」の中で、タンゴはガウチョとかならず者とか、そういう連中の一種の宗教音楽であるということをお書きになりましたね。

B／私は昔、タンゴについて書いておりましたけれども、タンゴが宗教的な音楽だと言ったとは思いません。タンゴというのはブエノスアイレスの下町、売春街だと、ならず者の間の音楽です。

N／ええ、わかっています。いま宗教と言った、わたしの言い方が悪かったと思いますが、ならず者たちの間には、純粋な、報酬を期待しない、無償の勇気というものがある。ボルヘスさんの本によれば、彼らはそれを信じている。そういう意味で、それは一種の宗教です。それを音楽で端的に表わしているものがあるとすれば、それはミロンガでありタンゴである、ということだったと思いますが……。

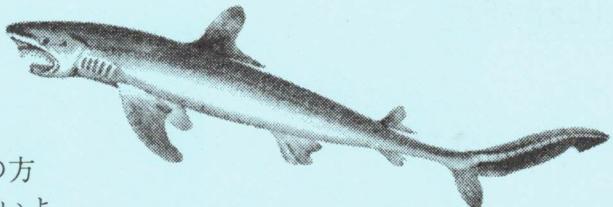
このあと真の勇気とは何かというようなことに話が逸れてしまい、タンゴ談義はこれ以上進展しなかった。いま改めて「タンゴの歴史」(岸本静江訳『エバリスト・カリーノ』所収、国書刊行会)を読みかえしてみると、わたしが対談で述べたことは、本の要約としてはおおむね間違っていない。ただボルヘスは、タンゴの「官能性」ばかりが強調されて、闘いの歌であることがわすれられていること、初期のものと違って最近のタンゴが「自分の不幸を思い入れたっぷりに嘆き、他人の不幸を祝う恨み妬みの歌に堕してしまった」ことをなげいている。

本稿の表題について一言。「好き」にもいろんな種類があるはず。ボルヘスがタンゴを好んで口ずさんだとは思えないが、「ブエノスアイレスの夕暮れと夜が生みだした」かけがえのない音楽として、彼がタンゴを愛していたことは間違いないだろう。

(なかむら けんじ、  
東洋大学教授、  
東京大学名誉教授、  
ボルヘス会々員)

# ピアソラの息子は「サメ釣り」に熱中

首藤由之



アルゼンチンで手渡された一本のビデオテープが手元にある。ビデオの中身は「サメ釣り」。延々とサメを釣り上げる様子が収められているが、なかでも目立つのが、繰り返し登場する白髪混じりでアゴヒゲたっぷりの中年男性だ。誰であろう、この中年男性こそ、現代タンゴの巨匠、故アストル・ピアソラの長男、ダニエル・ピアソラ(55)。ダニエルは、いま、「サメ釣り」に夢中なのだ――。

週刊朝日は、昨年から「世界の家族」シリーズをグラビア欄で連載している。そのアルゼンチン編を担当することになり、ブエノスアイレスに向かったのが2000年11月。3家族取材がノルマで、「アルゼンチンといえばタンゴ、タンゴといえばピアソラ」と、単純な発想でピアソラ一家の取材と相成った。

詳しくは週刊朝日(1月19号)をご覧いただくとして、この会報で「そもそもピアソラとは」と書くのはヤボだろう。ともかく、ブエノス市内のダニエルの自宅を訪ねたのが11月16日。いきなりダニエルに、「ピアソラ家人間的な側面を取材したい」と申し出ると、ダニエルの頬が緩んだのが印象的だった。

「いや、その方が私はうれしいよ。来る記者は皆、音楽のことばかり聞くからね」

シンセサイザー奏者として、かつては父の楽団に所属したこともあるダニエルだが、4年前にチック・コリアらを招いてコンサートを開いたのを最後に、音楽活動はいっさい行っていない。ダニエルは、その理由について多くを語らないが、ほかの家族の話を総合すると、父の名が一種の「重荷」になった側面は否めないようだ。

**一家**について一通り話を聞き終えた後、「サメ釣り」に話題を移すと、とたんにダニエルが饒舌になつた。実は、先に取材したダニエルの息子、ピピ(28)から父の趣味のことを聞いていたのだ。ほんの軽い気持ちで質問したつもりだったが、

「サメ釣りは面白いよ。一匹釣り上げるのに1~2時間かかる。途中でボートにアタックしてくるサメもいて、そのスリルがたまらない。今までの一番の大物は、1999年3月にマル・デル・プラタ沖であげた2メートル80センチのサメだね。重さは160キロもあつ

た。父もサメ釣りが好きだったし、息子も覚えはじめていてね……」

何しろ、話が止まらない。ダニエルの書斎には釣り上げたサメの頭蓋骨がいくつも飾られていたし、サメの種類がわかるポスターなど、まさに「サメづくし」。そして翌日、家族の集合写真を撮影するために再び自宅を訪れるとき、いきなり冒頭のビデオを手渡された。「次にブエノスへ来たら、一緒にサメ釣りへ行こうよ」

ダニエルは狩猟も好きというから、「夏はサメ釣り、冬は猟」と趣味人としての生活を楽しんでいるようだ。仕事は、父・ピアソラの「音楽の遺産」を世に出すことと言っていた。姉のディアナ、ピアソラの3番目の妻、ラウラと3人で、パリに楽譜出版の会社を設立したことだ。

「枯れた」かに見えるピアソラの息子。タンゴファンには、その姿はどう写るのか。

(しゅとう よしゆき、  
週間朝日記者)

しんや よしあ

# 榛葉賛雄さんの移住 100 年を祝う

佐藤幸正



榛葉賛雄さん

9月30日午前、主催者の亜拓理事長山田ホルヘをはじめとする理事者たち、日本およびアルゼンチンの榛葉家の方々、佐賀県県人会、およびその他の関係者たちがブエノスアイレス港内のサルミエント号の前に集まりました。サルミエント号は、海軍の練習帆船で100年前榛葉少年が唐津から乗り組んでアルゼンチンに渡った船です。この日、日本の榛葉家からは、榛葉妙子（賛雄の兄の子供）、瀬戸昭夫（賛雄の妹の子供）、松永幸子（前記妙子の子供）及び山口礼子（妙子の子供）が参加し、アルゼンチンの榛葉家からは賛雄の子供ヴィオレッタ・シンヤ、後妻との間に生まれた孫7人、およびたくさんの曾孫たちが参加しました。

かつて艦長だった方が訪問者を出迎えてくださり、しばらくヴィオレッタさんと話を交わしておられましたが、やがて艦内を案内しながら、いろいろと説明してくださいました。老齢のヴィオレッタさんは手を引かれながら、艦内を歩いておられましたが、父賛雄がどのようにしてアルゼンチンへ渡って

来たか、英語で説明してくださいました。艦内には当時の乗組員たちの写真が掲載されており、そこには榛葉少年と鳥海少年も写っています。100年前、日本から2人の少年が練習艦に乗り込んだ証拠写真です。しかしながら鳥海少年のその後の消息については、榛葉少年の場合と異なり、詳しいことは何もわかつていません。

夕方、ブエノスアイレス市内のヴィクトリア教会でミサがあり、大勢の方々が参加しました。小生、所用のため参加が遅れ、駆けつけたときには散会後で、この点大変残念に思っております。

夜は、パンアメリカーナホテルで式典が始まりました。まずは両国の国家斉唱。これには日系学士会コーラスの参加があり、ひときわ美しい声が会場に響き渡りました。次いで、山田ホルヘの挨拶、在亜日本領事河西靖彦の祝辞につづいて、海外日系協会、OISCA、佐賀県知事、唐津市長のメッセージが続きました。日本の榛葉家からは賛雄の姪の榛葉妙子さんが挨拶を致し

ましたが、素直にご自身の想いを語ったことに共鳴したのでしょう、一番多くの拍手を浴びておりました。アルゼンチンの榛葉家からはアルゼンチン在住の、賛雄の孫にあたるホルヘ榛葉の挨拶があり、祖父のことを述べましたが、このスピーチは格調の高いもので、これも盛んに拍手を浴びておりました。ホルヘさんは首都で弁護士をしておられるということです。

亜拓の主催で式典が催され、その結果、在亜および在日の榛葉家の人々が一同に会したことは、小生にとりましては画期的な出来事でした。しかも、幸運にもその出来事に参加し、目の当たりにすることことができたこと、榛葉家の方々と親しく話を交えることができたことに大いなる喜びを覚えた次第です。

日系社会のために努力を惜しまず、数々の功績を残された榛葉氏に対し、改めて敬意を表しました。願わくば、わが日本で、もっと再評価されて欲しいと思っております。

（さとう ゆきまさ、弘前学院大学教授）

# アルゼンチン フォルクローレは今 ～宮下美和子さんに聞く～

福島 穆

昨年のわが国ではアルゼンチン・タンゴの演奏会が盛んでしたが、アルゼンチンのフォルクローレ界はどうか？

昨秋「アルゼンチン芸術集団」を率いて日本各地にアルゼンチンの全地域の民族舞踊と音楽を紹介し、交流の成果を大いに挙げられ、唯今、帰日中の宮下美和子さんにフォルクローレ界の近況の一端を語ってもらいました。尤も、本来スペイン語で「フォルクローレ」と申しますのは「民間伝承」のことありますからタンゴもその一部と申せましょう。「アルゼンチン芸術集団」の公演ではアルゼンチン全国各地域の音楽の調べにのせて表現力豊かで地方色の濃い舞踏が披露されておりました。タンゴもその一部として紹介され、大好評を得ておりましたのはこの意味での本来の「フォルクローレ」の紹介であったと申してよいでしょう。

## 芸術普及の新しい動き

芸術性豊かなアルゼンチンでは昔から各州に国立の音楽と舞踊の単科大学がありましてその地域の芸術の普及と教育に尽力しておりましたが、最近ではこれらのほかに、工芸、絵画などが新たに加えられ、さらに全地域の、いわば伝統芸術全てを含む「総合芸術大

学」の様相を呈してきております。このことは従来地方性の強いアルゼンチンの「フォルクローレ」が全地域にあまねく普及するという役割を果たしてきております。たとえばブエノスアイレスの舞踏・音楽であるタンゴが地方のフィエスタでも必ずといってよいほど演奏かつまた踊られるようになってきたということであります。従いタンゴの演奏には欠かせないバンドネオンのコースも各大学に続々と誕生してきております。従来は器用な人とかタンゴの好きな人がいわば個々に習って楽団に参加するという徒弟制度みたいなやり方が主流でしたが、今や公の場でタンゴの音楽と舞踏の教育が行われるようになっているわけです。また演奏だけでなく楽器の製作にも力を入れており手作りの楽器で演奏もするというわけです。なんとも将来が楽しみな状況ではありませんか。

## 新しきをたずねて古きを知る

それでは具体的な活動状況はどうかと申しますと、いわゆるオールドファンの方には申し訳ないのですが、やはりモダンなアレンジが主流をなしております。シンセサイザーや管楽器までも含む演奏も試みられるなど、いまや世界を

席巻した、あのアストル・ピアソラ風と申しますか、新しいアレンジが種々現れては従来に無い新風を作っております。そして歌のほうも単に声に出して歌うのではなく音でハモルとでも申しましょうか「パーパーッパー」とボーカルのみの演奏が大いに流行しております。とくにリトラル地方（ウルグアイに隣接するエントレリオス、コリエンテス州）出身の「ソレダ」(Soledad)という二人姉妹のボーカルの人気は大変なものでして全く素人としてスタートしたのですがモダンなハーモニーに加えて、各地の民謡や昔の名曲を新たに復活させまして音楽好きの老若男女は申すに及ばず、従来全く音楽に関心を示さなかった大衆までも引き込むという幅広い人気を得ておることであります。歌い始めた動機も独特でして稼いだ上がりで母親に牧場をプレゼントしたいという親孝行の見本的存在であります。このほかメンドーサ州出身のスペイというグループも人気抜群であります。これらのグループのCDが日本の大きなCD販売店で入手可能なのも有難いことであります。

## 昔の光今いずこ？

というような次第で従来の

伝統的で典型的なフォルクローレグループの方は大分押され気味ということになります。しかし彼らといえども伝統的なスタイルのみに固執するのではなく新しいアレンジを加えましてあちこちのペニヤ（演奏付きレストラン兼バー）で活躍中とのことであります。しかし新旧交代は世の常でありまして創立以来50年に及ぶ活動を続けてきました「ロス・チャルチャレーロス」の解散が伝えられておりますことはなんともさびしいことであります。演奏者が変わっても名前を残すという風潮が強いこの世界でこれはまたあっさりとした引退話であります。

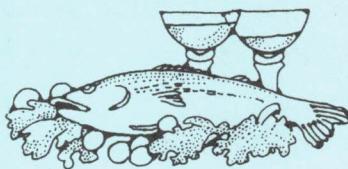
以前に日本で自作の「ミサ・クリオージャ」を初演して大好評を博しましたアリエル・ラミーレスはアルゼンチン音楽著作権協会会長の要職にあり多忙のようですが、時折独自の演奏会を開いているようです。かつてラミーレスとのコンビを長く組んで、来日の経験もあるチャランゴのハイメ・トレスは楽団編成が出来ず大衆の前からは一寸遠ざかっているようです。メルセーデス・ソーサほどの大物になりますと演奏会も大入りのようです。

栄枯盛衰は世の常でアルゼンチンのフォルクローレ界も例外ではないようです。しかし若い世代が確実に育ちつつある現状は将来大いに期待されてよいのではないでしょうか。

（ふくしま あつし、  
当協会編集委員）

## ペヘレイとフォルクローレ の楽しいツアー

石井教子



10月21日（土曜）、秋晴れの一日でした。

熊谷駅からバスで20分ほど、何かうちとけた仲間の様な集まりで、ペヘレイの安田養殖場につきます。社長の安田さんを中心にお話をうかがいます。

メダカのようなものが大きな水槽に入っていて、それより少し大きくなつたものが隣の円い水槽に泳いでいます。少しづつ大きくなって水槽を変わって行きます。食用になるまで1年半から2年半かかるとのこと、そのころのは30cmぐらいになっていました。アルゼンチンのペヘレイは大西洋の海と河に生きていて大きなものは、60cmほどあるそうです。

ペヘレイという魚は、フグ、サヨリより少しコクのあるとても美味しい魚で、お刺身に、レモンをかけて天ぷらに、お寿司にとおしゃれなものです。お吸い物にはどうかなとかフレンチ、イタリアンの素材にしたらどうかなと発展してしまいます。日本の市場でお目にかかるべきいろいろな料理にふけってしまいそうです。

今年のペヘレイ祭には、アルゼンチンの若い美男美女20名の舞踊団と楽団が参加しました。民族衣装がなんともすてきなものです。ボンボ、ケイナ、チャランゴ、ギター、ヴァイオリンと民族楽器をmajetedした楽団の演奏を聴き、本格的なフォルクローレ、情熱的なタンゴ、それにパンパのガウチョ（牧童）らのおどりを観ました。そしてアルゼンチンワインを飲みながらペヘレイの天ぷら、にぎり寿司、牛肉のアサード（長時間かけた炭火焼）、チヨリソー（ソーセージ）、トリ肉をいただき、それはそれはすばらしくアルゼンチンへ行った気分です。最後は会員のお客様とアルゼンチン舞踊団の方々がフォルクローレのやさしいもの、ガト、チャカレラなどを一緒におどり、楽しい一日を過ごしました。

新たなる世紀へのいざない、2001年はアルゼンチンののびのびしたラテンのモードでいきましょう。

（いしい のりこ、  
協会員）

インタビュー <この人>

## 人の温かみで育てたい

ペヘレイ養殖 25年の 安田直弘さん

ペヘレイを語る時、目がきらきらと輝く。「大学の卒論テーマ探しに水産試験場へ行ったらペヘレイしかなかったんです。それが出会いです」と屈託がない。

アルゼンチン・ラプラタ市の近くチャスコムス地域を原産地とするペヘレイは、安田さんが目をつける前すでに、ぜひ日本に紹介したいという日本人移住者の先駆者と神奈川県知事の内山岩太郎さんたちの熱意で研究用として日本の水産試験場に来ていた。

安田さんは水産試験場に籍を置いたのち独立して埼玉県で1万匹のペヘレイ養殖を始めた。研究のための病原菌が間違って全部の魚に広がってしまったり、いやがらせで農薬を投げ込まれてペヘレイが全滅したりで散々の目に遭った。25年後の今は20万匹になり、主に関東の日本料理屋に出荷している。

「最初のころ一軒一軒旅館やレストランをまわっていました。伊豆長岡の大旅館の板前さんが「素質に富む魚だ」と認めてくれて100種類のペヘレイ料理を作ってくれました。うれしかったですね」

きすに似た透き通った白

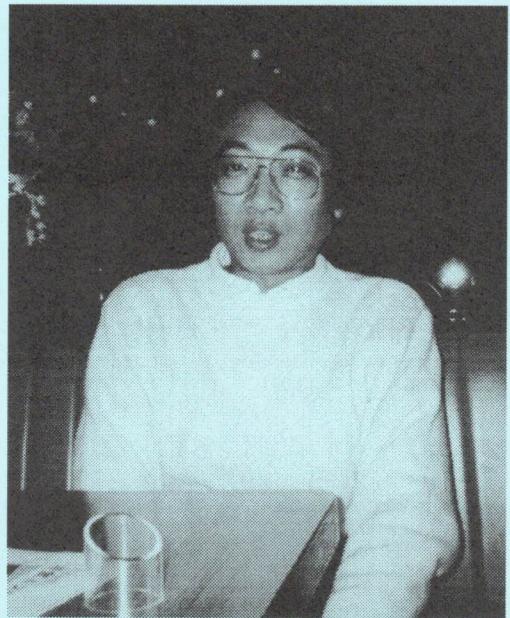
身のペヘレイがこうして、てんぷら、薄造り、にぎり、吸い物として世に出ることになる。

ペヘレイはストレスに弱い。人影が見えると逃げて餌を食べないし配合も難しい。思案していた時

同級生だった高校教師に頼み込まれて「悪がき」の水産高校生を研修生として預かった。「好きにやらせていました。そしたら見事な配合飼料を作ってしまったんです。こうでなければという理論や狭い角度にとらわれない360度の自由な発想なんですよね」

**安**田さんは、父親が本業のかたわら趣味が嵩じて錦鯉を販売するほどまでに、母親も半分趣味で養鶏場を持つという環境で育った。

「ペヘレイの水槽のまわりに雑草が生えていると、夏は水温が低く、冬は水温が高くて成育による条件になるのです。アルゼンチンと同じ環境で、たとえば遊休池を利用して粗放的な養殖をしてもっと安いペヘレイが食べられるように



したいんです。回転すしにペヘレイが出るようになればね。」

「ペヘレイにとどまらずに、海のない地域で海の魚が、逆に海辺では川の魚が、身近に手に入るたとえば残飯のような餌で容易に育つような方法を考えたいのです」安田さんは今、車海老、ふぐ、アオリイカなどで実験を重ねてその方向を模索している。

「神経質なペヘレイですが今は私が行くと寄ってきます。魚をていねいに育てて行くには人の温かみが欠かせないです。大企業の仕事ではないでしょうね」

ききて 河崎 勲  
(当協会理事、ダンコム  
ジャパン代表取締役)

## アルゼンチンサッカー 世界を制覇

アルゼンチンが世界一だ。11月28日、ボカ・ジュニオールスが国立競技場で行なわれたクラブ世界一を決めるトヨタカップでスペインのレアル・マドリードを下した。君臨するブラジルとヨーロッパを下し世界の頂点に立った堂々たる優勝だ。

ボカ・ジュニオールスのカンチャ（スタジアム）は港町ボカの真中にある。ファンの柄の悪いことでは人後に落ちない。そのファンが大挙してきたのだ。加えて日本人はアルゼンチンが出場するとまるでアルゼンチン人のような熱狂的な応援団になる。国立競技場はまるでアルゼンチンのどこかのカンチャのようだった。

開始3分と6分にボカのエース パレルモが早くも2点。メインスタンンドで中年のアルゼンチン夫妻が「Mi hijo, mi hijo」と狂喜して踊り狂っている。着ているTシャツに印刷されたパレルモの写真のところをつまみあげてはまわりの観客に見せつけている。スタジオは「アルヘンティナ」の大合唱だ。

アルゼンチンからかけつけたファンは、2000人とも5000人とも1万人ともいわれる。実数は分からない。チャーター機ではエセイサ空港を飛び立って

から成田に着くまで大勢が立ち放しで騒いでいたという。この日のための貯えをはたき、ローンで航空券を買い、中には自動車を売り払ってきたファンもいたようだ。

優勝の夜は、選手の宿泊していた新宿のホテルの周辺が一番たいへんだった。ファミリーレストランではなだれ込んだファンが勝手にビールを取り出してラッパ飲みで大合唱。

見かねた在日の日系2世たちが、「日本の警察は甘くないから、あんまり騒ぐと逮捕されるぞ」と沈静に躍起になつたが、「きょうくらいは大目に見てくれや！」

しかし試合後の競技場の引き際もふくめて全体としては秩序の保たれたイベントではあった。それにしてもはるばるかけつけたアルゼンチンファンの一番の本音は、「なぜこんなにめし代が高いの？」多くのファンがホテルの食事代にびっくり仰天して近くのファーストフードで何とかしのいでいた。多くのチャーター機は試合前日の月曜日に到着。試合翌日の水曜日夕方には本国に向けて帰ってしまった。「どうしたの？ 折角きたのに」「いや、もう滞在費が高くてたまりませんわ」

（河崎）

## 20世紀ベスト プレーヤーに マラドーナ

FIFA（国際サッカー連盟）がインターネットで募集した20世紀のベストプレーヤーに、マラドーナが選ばれた。これに対して、投票者の多くが15歳から30歳の年齢層に属し、サッカーを熟知しているにもかかわらずコンピュータになじみ薄い30代以上の層があまり参加できなかつたとクレームがついている。

ブラジルのザガロ元代表監督は、「悪い冗談だ。マラドーナが2人集まつてもペレにはかなわないよ」と言っているという。

（らぶらた報知紙より）



# 秋篠宮文庫へ教育図書 5,858 冊海を渡る

ブエノスアイレス日亜学院の「秋篠宮文庫」に向けて大量の寄贈図書がいま海を渡っている。一昨年11月30日に創設された文庫はいまだ充分な図書が揃っていない。中南米各地の日本語学校に共通した悩みがここにもある。日本の図書とくに最近の出版物は喉から手が出るほど欲しいとの声が多く寄せられている。

確かに多くの篤志家や学校から教育用図書の寄贈の申し出がある。しかしあつも輸送の問題で頓挫せざるを得なかつた。まして地球の裏側までの輸送は莫大なコスト負担になる。こうした難問を一挙に解決してくれたのが、戦前からアルゼンチン航路を経営している(株)商船三井だ。

「輸送は単に物を運ぶだけではなく、文化と文明も運ぶのが眞の姿です。国と国を結ぶキズナになることがわが社の哲学です」と当協会副会長の友国八郎・商船三井相談役。

海上運賃全額フリーで協力しようとなり、これに呼応するかのように5,858 冊の教育用図書が各方面から横浜の倉庫に届けられた。

それは一昨年の秋篠宮文庫創立式典に代表をブエノスアイレスに派遣した茨城県境町小学校、昨年4月ブエノスアイ

長田小学校	2,887 冊
日本図書出版協会	2,100
角川書店	600
主婦の友社	271
合計	5,858 冊

レスで開催された各国図書出版協会の世界大会に参加した出版社、秋篠宮文庫への図書寄贈を呼びかけるタンゴ・コンサート(香坂優さんとセステット・スール)を主催された主婦の友社と角川書店からの暖かい贈り物であった。

この輸送手続きには、外務省および国際協力事業団のご助力も頂いた。このような各方面からの善意の結晶を積み込んだサンパウロ・チャレンジャー号は、12月28日に横浜を出帆し、パナマ運河を通過して2月5日にブエノスアイレスに入港の予定。

日亜学院では秋篠宮文庫の充実と整備をすすめる一方、アルゼンチン各地の移住地にある日本語学校、パラグアイに新設される日パ学院さらにブラジルの日本人会日本語学校にも寄贈本の一部の配布を予定している。

## 冬季スペイン語講座盛況

1月9日から始まったスペイン語講座は、この寒さにもかかわらず熱気に溢れている。初級Bクラスは9名、中級は8名と盛況ぶり。

今期の特徴はオジサマ族が増えてきたこと。今までの語学力にさらに磨きをかけようとのなかなかのご熱意。

これに応えて、講師のリナ先生はタンゴの歌詞などを用意して講義の巾を広げる一方、中級のある聴講生は美空ひばりが歌って評判になった「川の流れに」のスペイン語訳を持ち込んで披露するなど和気あいあいの雰囲気。

## 協会事務局を増強

パソコン2台を入れて記録保存、経理を近代化、山下美里さんに秘書としてきていただきました。

### ごあいさつ 山下美里

「1月から秘書を務めさせていただいております山下美里と申します。アルゼンチンが大好きな私にとってこんなに楽しい職場はありません。昼は2人の素敵なおじさまと、火曜と金曜の夜はスペイン語教室のリナ先生と非常に贅沢な日々を送っております。お近くにお越しの際は是非協会にお立ち寄りください。今後ともよろしくお願ひします。」

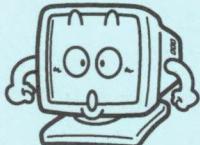
# 本誌の新しい タイトル

30号で新しいタイトルを募集したところ、52件の応募を頂きました。12月の編集会議で討議して6つの候補に絞り、実物大のレイアウトで実際に使うブルーの紙で印刷するなどの経過を経て第一面のようなタイトルを採用しました。応募の中には、アルゼンチンの風物を彷彿とさせるものや遙かな友を思い出させるものなど捨て難いものがありました。政治・経済から、文学、音楽、スポーツまで包含する幅広い協会活動に沿うタイトルという考え方でこのタイトルに決定しました。

## 協会オフィス のEメール

協会のオフィスにパソコンを設置しました。Eメールアドレスは、

**argentina@nifty.com**



なんと、会報のタイトルと同じものが設定できました。会報用の投稿原稿送り、事務局への問い合わせ・提案・文句！？など気軽に打って下さい。

## 催し物

【※】は当協会員特別割引

### ■ ラウル・ラビエ&セステート・スール

1月16日より3月29日まで。

日本全国各地を公演。

問い合わせ先：民音 03-5362-3440

### ■ 牧田ゆき チャマメ・タンゴ Live

2月2日 20:00

新宿：エル・パティオ 03-3363-6931

新宿区西新宿7-1-8 B-1

荻窪：奇問屋 03-3332-7724

杉並区荻窪3-3-8 B-1

### ■ 大沢美穂ピアノリサイタル

2月15日 19:00

東京文化会館小ホール

問い合わせ先 東京：インターナショナル・トーキョウ 03-3475-6870

大阪：シーナルクラング 066-6957-3345

アルゼンチンを代表するヒナステラの作品を含み、ほかにドビュッシー、シューマンなど。

(107-0052 港区赤坂9-1-7-575 インターシューズトーキョウ)

### ■ 第28回国際雪像コンクール

2月3日—2月9日

場所：さっぽろ雪まつり大通会場国際広場

アルゼンチン代表 Walter Sotelo、Maria Luisa Quain、Susana Diaz の3名が参加予定。

日本アルゼンチン協会会報31号 2001年1月20日発行

発行人 野村秀治

編集長 河崎 勲

発行所 社団法人 日本アルゼンチン協会

105-0004 東京都港区新橋1-17-1 新幸ビル

電話 : 03-3501-4684

FAX : 03-3595-3932

Eメール : argentina@nifty.com

印刷所 株式会社 イデア・インスティテュート